

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00418

研究課題名 (和文) ジョン・ホークスワースの『航海記』(1773)が英文学に与えたインパクトの検証

研究課題名 (英文) The Literary Impact of John Hawkesworth's Voyages (1773)

研究代表者

和田 綾子 (WADA, Ayako)

鳥取大学・教育支援・国際交流推進機構・教授

研究者番号：60283967

交付決定額 (研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000 円

研究成果の概要 (和文)：本研究はリンネの植物学の「性の放縦さ」の比喩に基づき『植物の愛』(1789)を出版したErasmus DarwinがいかにJohn Hawkesworthの『航海記』(1773)の第二巻を中心として暴露されたタヒチの異文化情報にその創作の契機を得たかを明らかにした。また、同巻で詳らかにされたArioiの衝撃を、Darwinの『植物の愛』、Gibbonの『ローマ帝国盛衰史』(1776-88)、Malthusの『人口論』(1803第二版)、Giraudouxの'Supplement Au Voyage De Cook'(1937)に辿って明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意味とは、現在では歴史学者にはもはや注目されることのないHawkesworthの『航海記』(1773)をイギリス・ロマン派以降の文学等に影響を及ぼした一級の資料と見なし、そのインパクトを検証したことにある。また、本研究のもうひとつの学術的意義とは、リンネの植物学が急進的言説と見なされるに至った理由を、Erasmus Darwinの『植物の愛』(1789)に直接求めるのではなく、Hawkesworthの『航海記』第二巻に現れる「タヒチの異文化情報」に求め、DarwinのHawkesworthとの隠れた繋がりを追究したことにある。

研究成果の概要 (英文)： This study focused on the role John Hawkesworth played in spreading crucial knowledge of the South Seas through the publication of the Voyages (1773) in terms of the following two points. First, this study elucidated how human sexuality in Tahiti, as revealed in the second volume of the Voyages, substantiated the sexual system of Linnaean botany and thereby motivated Darwin to produce The Loves of the Plants (1789). Secondly, this study examined the various responses to the idea of the 'Arioi' first communicated in Hawkesworth's Voyages in contemporary literature, history, philosophy and twentieth-century French drama: namely, in Darwin's The Loves of the Plants (1789), Edward Gibbon's The History of the Decline and Fall of the Roman Empire (1776-88), Thomas Malthus's An Essay on the Principle of Population (1803), Denis Diderot's 'Supplement to Bougainville's Voyage' (1796[1772]), and Jean Giraudoux's Supplement Au Voyage De Cook(1937).

研究分野：英文学

キーワード：Hawkesworth's Voyages Erasmus Darwin The Loves of the Plants Tahiti Arioi Linnaeus B lake

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、イギリス・ロマン主義文学をグローバルな文脈から読み解く試みとして開催された 2014 年の東京大学での国際学会（‘Romantic Connections’）において、和田が「リンネの植物学」のイギリスと日本での受容の在り方の比較を論じる中で、同植物学が、本来、階級と秩序を重視する保守性を有していることを理解したことを原点としている。つまり、「リンネの植物学」が、本来、保守的なものであったにも拘わらず、どうして 18 世紀後半のイギリス・ロマン主義文学においては、急進的な思想として人々に認識されるに至ったのかという問いが本研究の根底にある。

2. 研究の目的

本研究の着想に直接つながったのは、2017 年の東京大学での国際シンポジウム（Pacific Gateways: International Symposium on English Literature and the Pacific Ocean, 1760-1914）での口頭発表である。和田は、この中で、特に John Hawkesworth(1720-73)が編集し、出版した *An Account of Voyages* (3 vols.1773)の英文学への影響を論じた。

和田が注目する Hawkesworth の『航海記』第二巻のタヒチに係る記述は、James Cook と Joseph Banks の日誌に基づき、Hawkesworth が更に自らの心情を加えて書き直したものとなっている。つまり、三者の合作に他ならない。著名な歴史家の J.C.Beaglehole が、1955 年に Cook の自筆原稿である Canberra manuscript を出版し、1962 年には Joseph Banks の自筆原稿を出版した後は、Hawkesworth の『航海記』は、歴史学者にとっては信憑性の低い資料となった。しかし、Beaglehole が述べているように、1893 年に W.J.L. Wharton が James Cook の Mitchell manuscript を出版するまでは「Hawkesworth が Cook である」と錯覚されていたのであり、特にイギリス・ロマン主義文学への影響を考慮するのであれば、Hawkesworth の『航海記』こそが第一級の資料に他ならない。本研究の独自性とは、歴史学者が、もはやほとんど注目することのない Hawkesworth の『航海記』を調査の対象とし、同書の第二巻を中心として現れるタヒチに関する異文化情報の文学的インパクトを調査した点にある。

18 世紀後半における「リンネの植物学」に対する人々の認識の変化については、リンネの原書を二冊翻訳し、*The Loves of the Plants* (1789)を出版した Erasmus Darwin が深く関わっていることは明白である。他方、Darwin 研究の第一人者である Desmond King-Hele は、Darwin が、1760 年代に医業を営むかたわらで、James Watt (1736-1819) や Matthew Boulton (1728-1809) らと付き合い、まさに産業革命に深くかかわっていたにも拘わらず、1770 年代から「リンネの植物学」に関心が移った理由を説得的に説明することはなかった。和田は、Darwin が「リンネの植物学」や文筆業に深い関心を抱いた背景には Hawkesworth の『航海記』の多大なる影響があると考え、本研究においては、Darwin の Hawkesworth との隠れた繋がりを追究した。本研究のもうひとつの独自性とは、「リンネの植物学」が急進的言説であると人々に認識されるに至った理由を、Erasmus Darwin の『植物の愛』(1789)に直接求めるのではなく、Hawkesworth の『航海記』(第二巻)に現れるタヒチの異文化情報まで遡って求めたところにある。

3. 研究の方法

本研究の初年度にあたる 2019 年度 8 月～2020 年 3 月に、鳥取大学のサバティカル研修制度を活用し、Durham University (U.K.)の Visiting Fellow として、研究拠点をロンドンに移し、主に大英図書館で調査に集中し、帰国後は更なる文献調査を行った。本研究期間における調査内容としては以下の三点が挙げられる。

- 1) Hawkesworth の『航海記』第二巻を中心として詳らかにされたタヒチの異文化情報が、その誤報も含めて、18 世紀後半の文学・歴史・経済・哲学から 20 世紀前半の演劇に至るまで、与えたインパクトが大きいものであることを、以下の作品に辿った。Erasmus Darwin's *The Loves of the Plants* (1789), Edward Gibbon's *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire* (1776-88), Thomas Malthus's *An Essay on the Principle of Population* (1803 [1798]), Denis Diderot's 'Supplement to Bougainville's *Voyage*' ([1772]1796), Jean Giraudoux's *Supplément Au Voyage De Cook* (1937).
- 2) 和田が専門とする William Blake の'The Ancient of the Days' (Frontispiece to *Europe* [1793])の象徴的なデザインを Hawkesworth の『航海記』との関連から捉え直した。この銅版画がブレイクによって 30 年に亘り、彩色により修正され続けたことから、特に以下の三つの学術機関に調査を申し込み、このデザインの各原本の違いも調査した。
 - ・大英博物館(Prints and Drawing Room): Blake の原本の *Europe* Copy D と Copy a を調査した。
 - ・The Whitworth Institute (Manchester University): Blake の原本の'The Ancient of the Days' (c.1827)を調査した。
 - ・The Fitzwilliam Museum (Cambridge University): Blake の原本の *Europe* Copy K と Copy M を調査した。
- 3) Erasmus Darwin が John Hawkesworth の『航海記』に多大な影響を受けていたことの裏付け調査を行った。

4. 研究成果

概要で先に述べた通り、本研究はリンネの植物学の「性の放縦さ」の比喩に基づき『植物の愛』(1789)を出版し一世を風靡した Erasmus Darwin が、いかに John Hawkesworth の『航海記』(1773)第二巻を中心として暴露されたタヒチの異文化情報にその創作の原動力を得ていたかを明らかにした。18 世紀に広まったリンネの植物学は、本来、階級や秩序を重視する強い保守性を有していたが、イギリスの 18 世紀末には、それが全く逆の、体制を転覆させる急進的思想として認識されるに至っている。本研究では、この変化は、リンネが分類に用いた植物の雌蕊と雄蕊の奔放な性の比喩が、『航海記』第二巻に現れるタヒチの'Arioi'の概念の暴露により、まさに現実的な人間のセクシュアリティの表象として Erasmus Darwin に認識され、『植物の愛』として作品化されたことによるものであることを明らかにした。

また、Hawkesworth の『航海記』第二巻で詳らかにされたタヒチの「アリオイ」の衝撃を、Darwin の『植物の愛』、Edward Gibbon の『ローマ帝国盛衰史』(1776-88)、Thomas Malthus の『人口論』

(1803 第二版)、Denis Diderot の‘Supplement to Bougainville's *Voyage*’(1796 [1772]), Jean Giraudoux の *Supplément Au Voyage De Cook* (1937)などの 18 世紀後半の文学・歴史・哲学及び 20 世紀前半の演劇に辿った。本研究は、「アリオイ」が 18 世紀後半以降の洗練されたキリスト教社会のヨーロッパにおいては、polygamy (複婚)と認識され、その真偽が問われ、古代のブリトン人や人口抑制或いは増加策、及び戦争とも連想されるに至ったことを明らかにした。

ブレイクの『ヨーロッパ』(1794)の口絵は四折版の銅版画であるが、特にブレイクが晩年に彩色して仕上げ、‘The Ancient of Days’と呼ばれる、ホィットワース美術館(マンチェスター大学)の所蔵版は、2019 年 9 月~2020 年 2 月にテート・ブリトンで大規模に開催されたブレイク展の看板絵となった。ブレイクが約三十年に亘り、彩色によって修正を繰り返したこの象徴に満ちた銅版画の本来の意味とその意味の変容について、和田は Hawkesworth の『航海記』との接点を追究し、ロンドンで収集した資料を中心として精査し、学会発表を行った。これまで、この雲の切れ間に現れる球体下に広がる深淵へと手を伸ばす人物は、創造主、ブレイク神話のユリゼン、或いはニュートン との関連が指摘されて来たが、本研究では、この作品の意味が聖と俗の二極間で移ろう様を、1769 年 6 月にタヒチ島で観測された稀有な天体現象(「金星の太陽面通過」)との関連から説明した。今後、本発表内容は論文として公表する予定である。

本研究期間の業績をまとめると以下の通りとなる。

[著書・論文]

Ayako Wada, ‘Flora Japonica: Linnaean Connections Between Britain and Japan During the Romantic Period’, *British Romanticism in Asia*, Ed. Alex Watson and Laurence Williams, Basingstoke & New York: Palgrave Macmillan, 2019, 67-91.

Ayako Wada, ‘Hawkesworth’s *Voyages* and the Literary Influence on Erasmus Darwin’s *The Loves of the Plants*’, *Tottori University Education Center Bulletin* 17 (2021): 77-92.

Ayako Wada, ‘The Lingering Impact of Hawkesworth’s *Voyages*’, *Center for Liberal Arts Education Bulletin*, *Tottori University* 20 (2024): 43-53.

[学会発表]

和田綾子、ブレイクの『ヨーロッパ』口絵再考(‘Blake’s Frontispiece to *Europe* Revisited’)、イギリス・ロマン派学会第 48 回全国大会発表(2022 年 10 月 16 日、松山大学)

Ayako Wada, ‘Hawkesworth’s *Voyages* (1773) and its Literary Impact’, the 51st Wordsworth Summer Conference (Rydal Hall, Cumbria, U.K.), 13 August, 2023.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ayako Wada	4. 巻 17
2. 論文標題 Hawkesworth's Voyages and the Literary Influence on Erasmus Darwin's The Loves of the Plants	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tottori University Education Center Bulletin	6. 最初と最後の頁 77-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 Ayako Wada	4. 巻 20
2. 論文標題 The Lingering Impact of Hawkesworth's Voyages	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Centre for Liberal Arts Education Bulletin, Tottori University	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 和田綾子
2. 発表標題 ブレイクの『ヨーロッパ』口絵再考 (Blake's Frontispiece to Europe Revisited)
3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会第48回全国大会（2022年10月16日、松山大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ayako Wada
2. 発表標題 Hawkesworth's Voyages (1773) and its Literary Impact
3. 学会等名 The 51st Wordsworth Summer Conference (13 August, 2023, Rydal Hall, Cumbria, U.K.) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Ayako Wada, ‘Flora Japonica: Linnaean Connections Between Britain and Japan During the Romantic Period’, British Romanticism in Asia, Ed. Alex Watson and Laurence Williams, Basingstoke & New York: Palgrave Macmillan, 2019, 67-91.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------